

連続学習会第2回「働くかたちを人に合わせる」開催報告

2024年12月

明治学院大学社会学部附属研究所 相談・研究部門

第1回に引き続き「ひきこもりなど生きづらさのある当事者とともに支援や社会のありかたを考える連続学習会」を開催しました。概要は以下の通りです。

◇開催概要

日時：2024年12月6日（金）15～17時

場所：明治学院大学社会学部附属研究所多目的ルーム

内容：話題提供 長井岳さん、鈴木かときさん（創造集団 440Hz）

アイスブレイク

ショートストーリーズの作成と発表

全体での感想共有



長井岳さん

まず、創造集団 440Hz の長井さんが、「当事者って何だろう」という、「当事者／非当事者」という区分を当たり前とすることに対して、疑問を投げかけることから始まりました。長井さんが創造集団 440Hz をつくるまでのお話があり、誰もが「当事者」になるために、演劇を通じて日々の自分自身のありようを捉えなおすことが会の目標であると話されました。

続いて、アイスブレイクとして、「名前鬼」という身体を動かすゲームや、拍手とともに身体で表現した「ON/OFF」を切り替える「二拍子」のエクササイズを行いました。

次に、ショートストーリーズという形式で参加者が3、4人のグループに分かれて日々の活動や感情の中から「切実なこと」をテーマを選んで演劇をつくり、発表しました。まず、グループ内で3～5分程度のオリジナルストーリーを、配役やストーリー構成をつくりました。そのプロセスにおいて、切実さをめぐり自分自身が経験したことが共有されました。演劇のテーマはそれぞれ、①動けなさ、②暮らしのかたちを義母に合わせる義理の息子、③ハラスメントとその対処、④周囲の働きかけに動じず自分自身のスタイルを貫くこと、でした。

全グループの発表後の感想共有では、演劇を通して、自分が違う役を演じたり、自身の役を客観的に見たりすることで、当事者や支援者だけでなく、家族の立場の方達にとっても、自分の視点や立場を相対化するのに良いのではないかとのお話がありました。自分のテーマではない他者の切実さにも、意外と自分が合わせられる部分があり、演じることができたという感想もありました。また、演劇を見た感想としては、それぞれの演劇が自分自身に合わせて作っているわけではないものの、どの演目にも共感できるポイントがあったとお話がありました。

一方で、アンケートでは「誰でも当事者性を持っているというのだということを実感しやすかった」というご感想もあれば、「事務局の趣旨が伝わりにくかった」というご意見もいただきました。このことから、支援や社会の在りかた、そしてそれに影響される自分自身の捉え方や価値観を振り返るためのきっかけを、十分に提供できなかった可能性があると感じています。いただいた貴重なご意見を参考に、今後も支援する／される関係性およびその背景にある社会規範を問うていけるよう、学習会を一層充実させていきたいと思っております。（ソーシャルワーカー 森香苗、竹沢昌子）